

死別した親との〈かかわり〉

— 描画にあらわされたイメージを通して —

鍛治 まどか

1. 問 題

1-1. 不在の他者との〈かかわり〉

日々の生活の中で、親しい人たちから離れて一人になると、孤独や不安を感じることもある。だが、一人でいるからといって必ずしも孤独や不安に苛まれるわけではない。それは、一人でいる時にも、そこにいない誰かの存在を感じていられるからなのだろう。現前する相手との関係ではなく、不在の誰かとつながっている感じを抱き、そのような誰かと関係を持つとは、一体どのようなことなのだろうか。

一人でいる時にも、そこにいない誰かと一緒にいることに関して、Winnicott, D.W. (1965) は「一人でいられる能力」について述べている。彼は、「一人でいられること」とは、一人でいてなお誰か他の人がそこにいることであるとし、人間が孤独を楽しむためには、一人でいられる能力が必要であると考えた。この能力は、幼児期に誰か他の人と一緒にいながらも一人でくつろぐことができるという体験を基盤にしてできあがるものであるという。そのような過程を経て、幼児は母親が実際に付き添ってくれることをあきらめ、母親がいなくなることに対処していく。こうした Winnicott, D.W. の説に従えば、我々が一人でいても満足していられるのは、幼児期に母親との関係の中で、一人でいても不在の他者と一緒にいることができる能力を身につけたからなのである。それでは、その能力は幼児期に獲得され、その後の人生では揺らぐことなく「一人でいられること」が可能なのだろうか。これに関して、Klein, M. (1940) は、重要な他者との死別によって、内的な「良い」対象も喪失されるため、内的対象を再建し、喪失された対象との関係を新たに作り直す必要があると論じている。つまり、幼児期に母親との関係の中で安定した良い母親像を得られ、一人でいても不在の他者と一緒にいる力を身につけたとしても、良い母親像は重要な他者との死別によって喪失されるということである。そうだとすれば、死別にあたっては、一人でいられる能力が揺るがされるのではないかと考えられる。

大切な他者と死別した後に、内的対象としての相手と関係を持つということは、いかにして可能なのだろうか。誰が大切な他者となるかは人それぞれだが、誰しも子供として、親という重要な存在を持つ。その親と死別した後に、親との関係を作り直し、一人でのこされていても一緒にいることができるのだろうか。ここで、死別した相手はもういないという点で、生きている相手との関係と、死別した相手との関係とは異なるものと思われる。従って、本論においては、死別した他者と結ばれるものは、実体化されがたく個人の内に生起する体験であると捉え、一般的な関係と区別して〈かかわり〉という言葉を用いる。

1-2. 喪の作業

死別については、対象喪失体験の一つとして位置づけられ、すでに多くの研究がなされている。対象喪失とは愛着や依存の対象を喪失することを言う。そして、対象喪失に伴う様々な情緒を体験し、喪失を受容していく過程は、喪の作業 (mourning work) と呼ばれる。

喪の作業については、特に精神分析学において論じられてきた。Freud,S.(1917) によれば、愛する者を喪失した時、対象がもう存在しないのだからそれから別れなければならないということを要求する現実検討機能に反抗し、人間は現実から顔をそむけ、失われた対象は心の中に存在し続ける。そこで喪の作業とは、時間とエネルギーを消費しながら、ひとつひとつ現実の命令を遂行してゆく過程であるとした。Freud,S. 以後、Abraham,K.(1924) は、失われた対象が無意識のうちに摂取され、再び生かされることで、失われた対象との別離をしない状況を作ることが喪の作業であると主張した。Klein,M.(1940) はこれらの理論を受け継ぎ、失われた内的な「良い」対象を再建することで、信頼と愛情を持った失われた愛する対象に対する確信を強めることを喪の作業と考えた。これらの考えをもとに、小此木 (1990) は、Freud,S. が指摘した失った対象からの離脱と、Abraham,K. や Klein,M. が述べた、失った対象の内在化とが表裏をなす一つのプロセスが、喪の作業であるとした。

以上の説に従うならば、親との死別後には、喪の作業によって、親がもう存在しない現実を受け入れ、親から離れるとともに、心の中に新たに作り直された親との関係を持つと考えられる。それでは、その親との関係とは、どのようなものなのだろうか。新たな関係が結ばれるまでの過程について論じられる一方、その新しい関係とはどのようなものなのかということについては、注目されていないように思われる。本論は、この関係を捉えようとするものである。

発達の視点から死別した親と子どもの関係を論じたものとしては、やまだ (1998) の研究がある。やまだは、幼いとき・現在・未来の「あなたとあなたのお母さんの関係」を描いた三枚のイメージ画について調査を行った結果、死別後の母親は「苦勞する母」、「支えとしての母」といった、個人を超えた共通性を持つ類型化されたイメージとして把握できるとした。さらに、死者の表象は、過去経験の束縛から自由になり、良い方向へと発達していくものとした。

やまだの研究において特徴的であるのは、親との関係が親の死後も当たり前のように続くもの、連続的に発達していくものとされていることである。だが、「過去」や「未来」の関係として描かれたものが実際の過去の関係、未来の関係であるとは言えない。というのは、過去の関係というものはもはや無いものであって、現在表出された表象は現在の関係の一部と考えられるからである。同様に、描かれた「未来の関係」も、今生起している表象であるのだから、現在の関係の一部として捉えられるだろう。従って、発達の視点は重要だが、一方で、現在に焦点付けて考えることも必要である。また、親との関係が死別後も当たり前のように続くと考えると、死別に伴う断絶性を捉えることができない。これに対して、本論で扱う〈かかわり〉は親を喪失したという現実に基づいており、親がもういないという断絶を伴う内的な関係であり、イメージの世界のものである。さらに、〈かかわり〉とは固定化された死者の表象ではなく、現在生起する体験を指すものである。本論の目的は、このような〈かかわり〉が実際にどのようなものなのかを捉えることである。

1-3. イメージ調査法としての九分割統合絵画法

イメージの世界のものである〈かかわり〉がどのようなものかを捉えるためには、イメージの世界のものを映し出すことが必要となる。そこで筆者は、イメージを投影する方法として、描画を用いることとした。さらに、死別した親との〈かかわり〉を、できる限り表現上の束縛を受けずに捉えるために、描画法の中でも、九分割統合絵画法に注目した。

九分割統合絵画法とは、通常の画用紙を枠付けした後に、 3×3 に九分割し、その各々の枠の中に描画させるものである。森谷(1989)によれば、家族に対するイメージを調査する際に、多くの描画法で表現されるのは、家族関係の一つの局面が選択されたものであることが多いのに対し、九分割統合絵画法を用いると、思い浮かぶそのままを順番に描画することができるという。また、この技法は亡くなった親のイメージを捉えるものとしても実施可能であることが示されている。九分割統合絵画法を用いることによって、死別した親との〈かかわり〉を、意識的に一つに限定することなく、思い浮かぶままに描いてもらうことができるのである。また、九分割統合絵画法では、描画後に描画について描き手自身が意味づけすることによって、イメージがまとまりをもち、それが描き手にどのように体験されているのかが語られると考えられる。

九分割統合絵画法の解釈については、確立された解釈法がない。本論の目的は死別した親との〈かかわり〉を捉えることであるが、関係というものは目で見えず、本来一義的に表現できないものであろう。従って、死別した親について描いた絵に、二人の人間関係が可視的に描かれず、たとえば物が描かれたり、何も描かれなかったとしても、そこに〈かかわり〉が表現されていると考えられる。九つの絵のどれもが体験されている〈かかわり〉であると言えよう。それに加えて、亡くなった親を描くということ自体が、親との〈かかわり〉を持つことであると考えられる。従って、死別した親との〈かかわり〉がどのようなものであるか捉えるためには、筆者も描き手が描いていく過程をともに辿る、事例的な調査を行うことが必要だろう。

以上の理由から、筆者は、九分割統合絵画法を用いて調査を行い、その描かれる過程を個別にたどることによって、死別した親との〈かかわり〉の在り様を捉えることが可能ではないかと考えた。また、すでに述べたように、〈かかわり〉は生前の関係とは異なり、死別後に、喪の作業を経て新たに作り直された関係である。〈かかわり〉のこのような側面を捉えるには、喪の作業がどのように行われたのかを知ることが必要と考えられる。

2. 目 的

本論においては、死別した親との〈かかわり〉がどのようなものであるのかを明らかにすることを目的とした。その際、九分割統合絵画法を用いることにより、内的なイメージの世界のものである〈かかわり〉を映し出し、そのイメージ体験を把握できると考えた。さらに、〈かかわり〉は喪の作業を経て新たに作り直される関係であることから、インタビューによって喪の作業がどのように行われたのかを把握し、〈かかわり〉を喪の作業との関連において理解しようとした。また事例的な方法をとることにより、現在生起する体験としての〈かかわり〉を捉えようと試みた。

3. 方 法

2004年に調査を行った。父親か母親との死別を体験し、死別から数年が経過した者を対象とし、広く協力者を求めた結果、2名の協力者を得た。協力者には、個別面接調査を行った。まず九分割統合絵画法を実施し、そこから連想されることを尋ねた。その後、幼少時より死別以前、死別時、死別以後現在に至るまでの順番で、それぞれ自由に思いつくことを語ってもらった。

九分割統合絵画法の実施は、森谷(1986)の手続きに従って行い、「順番にコマずつお母さん／お父さんについて思い浮かぶものをそのまま何でも自由に描いてください。どうしても絵にできなければ、文字、図形、記号など何でもかまいません」と教示を行った。すべての区画に描き終わった後、その各々の絵に簡単な説明文が、言葉を記入してもらい、その後クレヨンで色をつけ完成してもらった。さらに、描かれた絵、文字をもとにして連想を尋ねた。最後に、全体に一つの題名をつけて記入してもらった。なお、教示では、「親との〈かかわり〉について」ではなく「親について」描いてもらった。なぜなら、イメージが想起されて意識にのぼる時は、必ず自己と対象の関係としてイメージされるものである(丸田,1999)。したがって、「親について」描かれたイメージというのは、実際には親と自身の関係をあらわすものであると考えられるからである。

4. 結果と考察 (「 」内は調査協力者の言葉からの引用である。)

4-1. Aさん 60代男性

Aさんは5年前に母親を病気で亡くしている。調査中、Aさんは落ち着いた様子であった。描画では、一枚一枚確認しながら丁寧に、集中して描きあげた。インタビューでは、言葉を選び、手振りを加えるなど、伝えようという気持ちが強く感じられた。また、時に宙を見て沈黙する時間もあり、母親への思いを語る際にはいたたまれない様子も見られた。図1がAさんの描画である。



図1 Aさんの描画『母親への思い』

一つ目の絵は、「大事にしてくれた母」を描いたものである。「三番目に生まれたけど非常に優しく大事にしてくれた。いい母親のもとに生まれたという感じ」と、母親が優しく、一生懸命育ててくれたことが連想された。二つ目の絵は、「やさしい母」を描いたものである。「お袋が愛情の深い人だった」と、ここでも優しい母親であったことが語られた。

三つ目の絵は、「指導」である。「だんだん大きくなると、なんでも一生懸命がんばってやれという。兄貴たちに負けるなど。そういう指導をずっと受けてきた」と母親からの期待とプレッシャーが語られた。四つ目は、「僕のがんばり」である。「私なりにはがんばったけど、私はガキ大将だった。素行が悪かった。したがって、認めてくれたのは半分」と語られ、ここで母親は全てを包むような愛情を注ぐ存在ではなくなっている。同時に、「親の意に反することも仕方がない。それによって自分を変えることはない」とも語られ、親と別の存在としての「自分」が立ち現れている。五つ目は、「反抗」である。「お袋のイメージ通りにならないと宣言した。世の中はこういう風という生き方ではなくって、自分は自分の生き方をしよう。人ができないことを俺はやる。私の私たる所以は譲れない。母親の言いなりにはならない」と語られた。ここでは、四つ目で生じた「自分」を確立することと、世の中や母親を否定する動きが強くあらわれている。

六つ目は、「母の限界」と題された。「私もそれまではお袋は立派な人だと思ってた。だけど、お袋も世間の人とほとんど代わらないと分かった」という、諦めのような気持ちである。このように理想的な親イメージが崩れることは成長の過程のなかで想定されることだろうが、そこからさらに A さんと母親の関係は変容していく。七つ目は、「精神的別れ」と題された。「母親と陰悪な状態になるまで話した。今考えると、私はお袋と私は人間的に対等だと思ってるから、それとも親子だからずけずけ言うけど、お袋は私のことをやっぱり子どもだと思っていたのかもしれない。自分の思う通りにならなかった私に対して、兄貴と比べてあまり評価が良くなかった。私の言うことを聞く立場にないと思ってた」と語られた。兄との比較は A さんと母親との関係に常に付きまとい、兄とは違う自分であること、唯一の特別な存在としての自分を認めてもらうことは、ここまで A さんの原動力となってきたようであった。けれども、直接ぶつかっても母親を動かさなかったとき、母親との離別が生じたと同時に、評価されない自分が引き受けられた。そして、「あとはもう、そういったことには深入りはしないで、浅い付き合いになったんです。ただ、まだ私は親は分かると思ってましたけど、ほけてきたんです」と語られたように、その「別れ」が取り戻されることはない。

八つ目は、「ボケによる親不孝の反省」である。「それまで私は、お袋っていうのは立派であって、強情で思い込みが激しいけど、それでも対等だと思っていた。ところがぼこっとほけてしまったお袋を見たときに、もっと子供としてお袋にやさしくしてやっとなれば良かったなあ」と連想された。認めてもらうことや分かってもらうことはもうどうしても叶わないというときに、対等なぶつかり合う関係を超えて、親子の絆が意識されている。

最後の九つ目は、「ありのままの理解」と題された。「母親に対する理解もありのままの理解にもとづいて接するべきであったし、自分自身もっとありのままに自分のことを理解して。考え方の違いは違いとして、違うということをお互いに理解をして、お互いに思いやる、その時期を持ちたかった。でもそれはかなわない。ただもう、白く塗ったんですけど、もう仏だけ

ら。いないから。私自身はまだ生きてますけど、反省しているんです」と語られた。

(1) 九分割統合絵画法に描かれたもの

Aさんの描画には、Aさんの人生の始まりから現在までが時系列に沿って描かれ、Aさんと母親がずっと一緒に描かれ続けた。Aさんにとって母親は、母親とAさんという関係の中にある。

初めに描かれた絵は、抱きかかえて母乳を与える母親と抱きかかえられる小さな赤ん坊としてのAさんであった。最初の絵には身体も描かれており、それはお互いの存在全体を含んだ〈かかわり〉のようである。この絵が他の全ての中心であり、そこから全てが生じる基盤となっている。「大事にしてくれた母」「やさしい母」の絵は、「思い出」とは性質の違う絵であると言える。それは過去の実体験でありながら個々の思い出を超越しているようであり、覚えている／いないとは別の次元で、母親が大事に育ててくれたことをAさんは「知って」いるのだろう。知るというのは「事実に関係なくただ信じているのではなく、自分の経験的事実に基づいている」(河合,1986)と言われるように、Aさんは事実として無かったにもかかわらずやみくもに自分は母親に愛されたと信じているのではなく、客観的に在ったか無かったかという問いを必要としない次元で、母親に大事にされたことを知っているのである。描画中にそのような母親との〈かかわり〉を体験したとき、Aさんは「非常に優しくして、大事にしてくれた」「お袋が愛情の深い人だったのかな」と優しさや愛情を感じていた。

その後、Aさんが自分自身の人生を生きようとするにつれて、見つめる母親と抱きかかえられる子供の関係は、正面衝突する関係に変化していく。二人の親子の絆が再び意識されたときには、取り戻すことのできない離別が生じている。

そして、最後にはお互いに目を閉じて二人並んだ姿が描かれた。それは、二人の間に「和解」がなかったためになし得なかったという「ありのままの理解」を描いたものである。二人は共にいるのだが、「(母親の顔を)白く塗ったんですけど、もう仏だから。いないから」と語られるような不在感、断絶も存在する。そこから語られるのは、「心残り」としか言いようのないAさんの「母親への思い」である。それでも、絵の中の母親は静かにAさんに寄り添っている。そのように「仏」となっても、一緒にいるという関係性のままに、二人の〈かかわり〉はおさめられたようだった。

(2) 喪の作業

Aさんは、「立派なおふくろに限界を感じて、なおかつ限界を認めないお袋」との「精神的別れ」をしたまま母親を失った。「当然長続きすると思っていた対等にやりあってる母親」を失った今、Aさんにとっての最も大切な思いは「もっと人間的に付き合えなかったか」という心残りであった。母親の死後、Aさんは「考え方の仕組み」を変えようとするようになったという。母親を「ありのまま」に理解することが叶わなかったという思い、母親が「ありのまま」のAさんを認めてくれなかったという思いが、そのように「いろんなことに対するありのままの理解」をしようとする原動力となっているようだった。Aさんは現在「人間っていうのを、または自分っていうものをみてみたい」と学問に取り組んでいるが、それはAさんの「第二の人生」

であると同時に、そのようにして生きていく道そのものが喪の作業ともなっているように思われた。

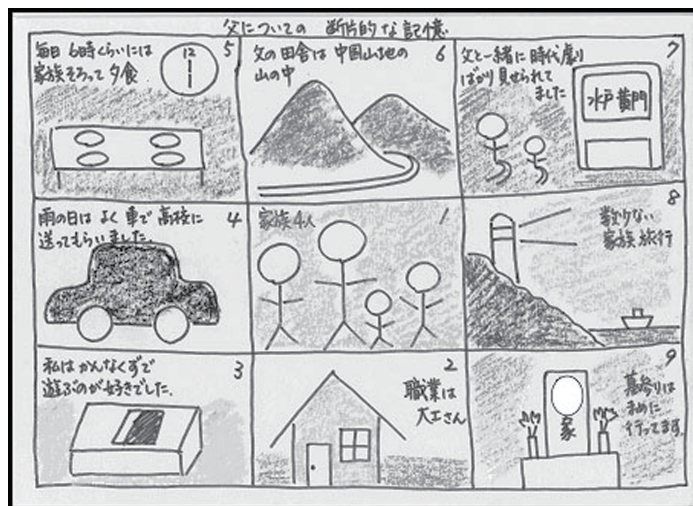
(3) Aさんと母親の〈かかわり〉

Aさんの描画では、Aさんと母親の二人だけが同じ画面に描かれ続けた。どの絵においても、二人はごく近い距離でかかわっており、その距離はAさんや母親の姿が変わっても変化しない。Aさんも母親も、若い時の姿をしているときもあれば歳を取った姿をしているときもある。Aさんの赤ん坊の頃や、「仏」としての母親との〈かかわり〉も体験されている。そのように、Aさんと母親の〈かかわり〉は、Aさんの誕生から母親の亡くなった現在に至るまで、変わらずすぐ傍にいる者同士の〈かかわり〉であると言えよう。

その一方で、そうして赤ん坊としての自分から人生の各過程での自身の姿を描くことができるということから、〈かかわり〉を体験しているAさんを見つめる、もう一人のAさんがいるのではないと思われる。たとえば、「私自身は反省している」といった語りからも、自分自身を見つめるAさんが感じられる。そうして自分を見つめることができるからこそ、変えたいと願うような過去をも含めて、過去を一步ずつ辿るようなAさんと母親の密な〈かかわり〉が体験されるのではないだろうか。

4-2. Bさん 40代女性

Bさんは、22年前に父親を突然の病死により、亡くしている。調査時は、物静かで、リラックスしているようだった。以下がBさんの描画である。



Bさんの描画 『父についての断片的な記憶』

最初は、「家族四人」の絵だ。Bさんが父親を思うとき、Bさんが子供の頃の家族という形での〈かかわり〉がまず生じた。Bさんの父親は、「すごく娘に対して優しくかったけど、でも何でもしゃべれる存在ではなかった」といい、家族についても、「客観的に見て恵まれた家族なんだろうなって思う反面、あんまり居心地は良くなかった」という。絵を見ても、家族全員

顔のない棒人間で、Bさんは家族の端に描かれており、冷たい印象である。

二つ目は、父親の職業が大工であることが描かれ、「良くその現場についてった。尊敬の世界」と父親の大工仕事について詳しく語られた。次に、「私はかんなくずで遊ぶのが好きでした」と父親の職場での自分が思い起こされた。「遊ぶのがすごい好きで、木の匂いがすごい好きでした」と、父親の作業場が匂いとともに想起される。父親個人と直接的な充足した関係があったわけではないようだが、父親の職業、職場を通してBさんは父親と自分を含めた居場所を持っていたようである。

四番目は、学生時代学校が嫌いによく体調を崩したBさんを、父親が迎えに来てくれた思い出を描いたものである。車に乗る時はBさんはいつも父親の隣にいたという。黒い車はBさんの自慢で、「かっこいいお父さん」を表しているのだろう。

五番目は、家族の夕食である。ここでは門限の厳しい家の不自由さが語られた。時計とテーブルで表現される夕食は、団欒とは程遠いものだったのかもしれない。六番目は、田舎への帰省を描いたものである。七番目は、二人が一緒にテレビに向かってる絵である。ここでは、「私が歴史を好きになったのは、昔は家に一台しかテレビがなくて、チャンネル権は父にあって、絶対時代劇だった。ずっと一緒に見てたから、その影響もあるかな」と自身の現在の在り方に父親が影響していることが語られた。ここで、一枚飛ばして、九番目の絵が先に描かれた。それはBさんによれば、最後はお墓の絵にしようと思ったからだという。飛ばされた八つ目には、家族旅行の思い出が描かれ、Bさんは「優しい父親でしたけど、取り立てて父との思い出って言われると苦しいな」と話した。

最後は、父親が眠るお墓の絵である。Bさんにとって、お墓が象徴するような“家”のつながりが、最後に描かれるべき重要なもののようである。「行って当たり前というか。行くとほっとするというか。仏壇の上の写真に話しかける。昔から、私のお婿さんは俺が探してやる、絶対気に入らないやつとは結婚させない、みたいなことを常々言ってた。でも、(亡くなったのが)結婚する前だったんで…」と連想された。ここまで、直接的な二人のやりとりは想像し辛かったが、最後にBさんへの愛情が感じられる父親の言葉が語られた。全体を振り返って、「イメージも絵にしたけど、もしかしたら、真実じゃなくて、私が勝手に後から作ってるイメージもあるんじゃないかって。だから、お父さんでどんな人だったけなあとかってたまに写真見ながら思う。そういう一面だけじゃなかっただろうって思うけど、やっぱりずっと、私にとっては素敵なお父さん、優しいお父さんというイメージ」とBさんは語った。

(1) 九分割統合絵画法に描かれたもの

Bさんの描画においては、家族で一緒に過ごした日常や非日常の出来事や、Bさんと父親が二人一緒にいた日常が描かれた。「断片的な記憶」という題名から感じられる距離感や、すべての絵が整っていることからもうかがわれるように、Bさんの描画においては一つ一つの〈かわり〉に強い情動は絡まず、整然とした形を与えられておさまっているようであった。これは、Bさんの特徴というだけではなく、死別から22年という歳月が流れていることも影響しているだろう。

最初に描かれたのは、Bさんがまだ子供の頃の家族全員のイメージであった。家族の中で一

緒にいたという形でBさんと父親の〈かかわり〉ははじまっている。それは、具体的な場面でもなく、表情も描かれない、あいまいな「イメージ」である。

その後は、あたたかさや窮屈さを醸し出す場に支えられて、安定的な〈かかわり〉が生じていった。そして、最後に描かれたのは、「墓参りはまめに行ってます」という現在形のBさんと父親の〈かかわり〉である。「取り立てて父との思い出って言われると苦しい」とその他のイメージが想起されにくいとは逆に、最後は「お墓の絵にしよう」とBさんが決めていたのは、それが父親の生前の出来事ではなく継続中の〈かかわり〉であるためだろう。この最後の絵は、それまでに描いた絵で展開されたイメージをおさめたものと言うよりは、普段からおさまっている〈かかわり〉の姿をそのまま描いたものであるように思われた。

(2) 優しい父親

「外へ食事行ったことないとか、家族で旅行行った記憶ってないなあって。客観的にないなあって思うぐらい」というBさんの言葉が示すように、特別な体験がない、特別な感情を伴わないというのが全般的な父親イメージのようである。そのようなイメージの中で、「いつも隣で乗せてもらっていた」という父親の車のイメージ(4番目の絵)においては、「車とは直接関係ない」と言いながらも連想が膨らみ、「友達から見ると結構素敵なお父さん」というイメージや「優しいお父さん」というイメージも語られ、いくつも良い父親イメージが想起された。

Bさんは父親の記憶を辿ってみて、父親のことを「あんまり良く知らなかったんだ」と感じたという。このように、Bさんと父親との〈かかわり〉には、不確かな部分が伴う。そんな中、良い父親イメージを実感できる〈かかわり〉を生み出す車のイメージは、そのような不確かさに対するまもりとなっているように思われた。「やっぱりずっと私にとっては素敵なお父さんていう、優しいお父さんていうイメージですね」というBさんの父親に対する全体的な信頼も、そのような良いイメージを大切にし、それにまもられているからこそ保たれるものなのではないだろうか。

(3) Bさんの喪の作業

インタビューでは、Bさんは父親が亡くなったという「実感が湧かないまま」現在まで過ごしてきたことが語られた。しかし同時に、普段から仏壇の上の写真に話しかけるというように、亡くなった父親が生活の中に場所を占めてもいた。長い年月の中で父親がどのような人だったかという記憶は薄れ、「お父さんてどんな人だったっけなあ」と写真を見ながら思うこともあるほどに父親の個性が薄れた中であってなお、その存在感は薄れなかった。このようにBさんにおいては父親との〈かかわり〉が生活の一部として保たれてきた。そして筆者には、このことがBさんの喪の作業に相当するように思われた。

従来の喪の作業という観点からすると、Bさんの場合は喪の作業が行われていないかのようでもある。Bさんのように喪失感が体験されない場合、喪失を受容するのを引き延ばしていると考えられ、「病的」な場合として捉えられてきた(小此木,1991)。しかし筆者には、22年間存在感を保ったまま、死別の実感を抱くことなく父親との〈かかわり〉を続けてきたBさんが、「病的」な引き延ばしをしてきたとは思われない。日本の場合には、仏壇やお盆があり、「本当

に死んでも、死んでいない」(小此木,1991)のような死生観が優勢であると言われ、Bさんの場合はこのような死生観が喪の過程を支えているのかもしれない。喪失は必ずしも破壊的なものとなって絶望をもたらすのではなく、変わらない日々の中で〈かかわり〉が保たれるという喪の作業も一つのあり方として充分可能なのではないだろうか。

(4) Bさんと父親の〈かかわり〉

Bさんの絵には、Bさんと父親が一緒にいた場面が多く描かれていた。それは、「いつも隣で」「ずっと一緒に」いたという記憶である。父親の様子や言葉といった具体的なものは見えにくく、父親のことを「あんまり良く知らなかった」という言葉にあらわされるように、Bさんと具体的な姿かたちを持った父親との間には大きな距離が感じられる。しかし、父親が亡くなっていなければ「いいお父さんじゃない部分もみたかも分からないんで、それはいいのか悪いのかよく分からない」と語ったBさんは、そのような距離を縮めることは望んでおらず、あいまいさを保った〈かかわり〉に満足しているようだった。このように、遠く離れていて、あいまいながらも一緒にいる体験をすることができる、そのあいまいさゆえに安定したものとして保たれているというのがBさんと父親の〈かかわり〉の形であると思われる。

5. 総合考察

5-1. 死別した親との〈かかわり〉

本論では、絵の中にあらわされた〈かかわり〉に加えて、描くこと自体が〈かかわり〉であり、描いていく過程は、〈かかわり〉が生じ、おさめられていく過程であると考え、個々の描画の過程を辿った。その結果、Aさんの描画では、二人でいつもそばにいるという〈かかわり〉を体験しているAさんと、そこから距離をとって一人でいるAさんとの二重の存在があり、Aさんが一人でいながらも変わらず母親と一緒にいるという〈かかわり〉がみられた。Bさんの描画では、遠く離れているからこそ安定して一緒にいるという形で〈かかわり〉があらわれた。その〈かかわり〉の形はそれぞれに非常に個性的なものであった。

また、描くこと自体が〈かかわり〉の過程であると考え、描く時の感情、描かれた絵に対する感情とは、〈かかわり〉に伴う情動体験である。Aさんは赤ん坊の頃母親が「愛情の深い人だった」と語ったように、覚えていない頃の母親に愛情を感じ取っていた。Bさんは父親に車で送り迎えしてもらったことからの連想で「ずっと私にとっては優しいお父さん」と語ったように、父親の生前の日常の中に優しい父親のイメージを確かめた。このように、死別した親との〈かかわり〉の中で、愛情や優しさを体験できることが分かった。体験された愛情や優しさは、親の生前に取り入れられたものとは限らない。それは、Aさんのように、記憶に無い時期のものでもあった。それが描画の中で現在の自分において体験された時、取り返しのつかない別れや、特別な体験がないという過去も受け入れられながら、それに固執するのではなく、愛情や優しさの語りでイメージ体験が閉じられた。このように、過去への固執でもなく、過去を変えてしまうのでもなく、暖かい感情とともに今ここにある過去を大切にしたい気持ちによって〈かかわり〉全体がおさめられた。そのような愛情の体験こそが、死別によって親がい

ない現実の中でも〈かかわり〉を支えているのではないかと推測される。

そして、〈かかわり〉は親がもういないという現実に基づいた内的な関係であり、イメージの世界のものであるという特徴がそれぞれにあらわれた。Aさんの場合、最初の二枚の絵や最後の絵は特に彼の現実経験というより、イメージとして形成された母親像であった。認められることなく取り返しのつかない別れをしたまま母親を喪ったという現実に対して、優しく大事に育ててくれた母親と、その腕に抱かれ、見つめられるAさんの〈かかわり〉や、ありのままに二人一緒にいるという〈かかわり〉は、イメージの力によって形成された部分が大い。

Bさんの場合、特別な体験がなかった現実の過去を、「素敵なお父さん、優しいお父さん」というイメージが包んでいるようであった。それは彼女自身にも「真実じゃなくて、私が勝手に後から作ってるイメージかもしれない」ことが自覚されていた。

そのようにして形成されたイメージがAさんの描画において中心と終わりに描かれたことや、Bさんが「優しいお父さん」を連想させる黒く硬い車の絵を一番重要だと述べたことから分かるように、それらのイメージは根拠のない空想ではなく、彼らにとって確固とした存在感をもったものである。このようなイメージの働きが、上述したような愛情の体験をもたらし、〈かかわり〉をおさめているようであった。

5-2. 喪の作業と〈かかわり〉

Aさんの喪の作業は、自分自身や人間を見つめなおし、ありのままに理解しようとするものであった。そして、Aさんと母親との〈かかわり〉は、人生をかけて変わらず傍にあり続けるものであった。Aさんの喪の過程が、これからの人生と一体のものであるのは、Aさんと母親の〈かかわり〉がそのようなものであるからこそなのだろう。さらに、自分を見つめ、ありのままの理解をするためには、これまで自分の歩んできた人生を見つめていくことも必要であろう。Aさんと母親との〈かかわり〉はそれを可能にする形をとっているとも言えるのではないだろうか。

また、Bさんの喪の作業は、日々の生活の中に安定した父親の存在感を持ち続けるものであった。そのような喪の作業があったからこそ、Bさんと父親の〈かかわり〉は、二人が一緒に居る場に支えられたものとして、あいまいさを保って、安定した形であらわれたのではないか。

ただし、この結果も、固定化されたものとは限らない。自分の生きる道や、日常の中での再認識というように、人生の一部としてこれからも喪の作業が行われ続けていくだろうし、〈かかわり〉がどのような形で生じるかも変わっていくのだろう。

このように、喪の作業と〈かかわり〉は互いに切り離すことができず、現在の〈かかわり〉の形が喪の作業の中で形成されてきたものであると同時に、現在の〈かかわり〉の形に応じて可能となる体験が異なり、これらの体験が喪の作業において重要な役割を果たしていると思われる。

以上のように、本論では死別した親との関係性を、喪の作業を経て形成される、親を喪失したという断絶を伴う内的なイメージの世界の〈かかわり〉として捉えた。そして、〈かかわり〉とは固定化された死者の表象ではなく、現在生起する体験を指すものとした。従って描かれた表象が〈かかわり〉の表象というだけではなく、死別した親を描くという体験そのものが〈か

かわり〉の体験として捉えられた。それにより、本論で扱った二例においては、〈かわり〉の、固定化されない、情動を伴った側面が捉えられ、それぞれの個性的な喪の作業に応じた個性的な〈かわり〉の在り様が示された。さらにそこでは、満たされない現実経験を癒すようなイメージが働いて〈かわり〉がおさめられ、〈かわり〉はイメージの力に動かされた生きた関係性であることが分かった。

6. 今後の課題

死別体験を捉えるには、年齢や死後の世界観など、様々な要因を考慮しなければならない。死別時の年齢や死別からの経過時間は〈かわり〉の在り様に影響していると考えられるが、今回はそこまで考察できなかった。そのような要因を考慮して今回示された〈かわり〉を位置づけるためには、さらなる調査や、事例研究が必要であろう。

また、今回の調査では、描画を用いたため、画用紙の上に表現することのできる、視覚的なイメージが主となった。描かれることによって、〈かわり〉に形が与えられることになり、現実のものとしての性質を帯びることになる。今回の調査における〈かわり〉は描画に促されたものであり、日常の〈かわり〉の中で同じような体験が起こるのかどうかは分からない。しかし逆に、このような方法を用いたからこそ、日常では分かりにくい体験を取り出して直接把握することが可能となり、イメージの世界の〈かわり〉が捉えられたと考えられる。

引用文献

- Abraham,K.(1924)Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Libido auf Grund der Psychoanalyse Seelischer Störungen. In :Abraham Psychoanalytische Studien Band I .FrankfurtM 1971 S.Fischer.
- 下坂幸三訳(1993) 心的障害の精神分析に基づくリビドー発達史試論、『アブラハム論文集—抑うつ・強迫・去勢の精神分析』岩崎学術出版社. 19-97.
- Freud,S.(1917)Trauer und Melancholie. Berlin:Verlag Volk und Welt.
- 井村恒郎訳(1970) 悲哀とメランコリー 『フロイト著作集第6巻』. 人文書院.137-149.
- 河合隼雄(1991) イメージの心理学. 青土社
- 河合隼雄(1986) 宗教と科学の接点. 岩波書店
- Klein,M.(1940)Mourning and its Relation to Manic-Depressive States. The International Journal of Psychoanalysis,21,125-153.
- 森山研介訳(1983) 喪とその躁うつ状態との関係 『メラニー・クライン著作集 3』誠信書房123-155.
- 丸田俊彦(1999) 想起・イメージ・洞察・治療. 福島章編 『イメージと心の癒し』金剛出版
- 森谷寛之(1989) 九分割統合絵画法と家族画. 家族画研究会編 『臨床描画研究4 特集描画の臨床的活用』金剛出版
- 森谷寛之(1986) イメージの多様性とその統合—マンダラ画法について—, 心理臨床学研究第3巻 第2号,71 - 82.
- 小此木啓吾(1997) リハビリテーションとモーニング・ワーク(悲哀の仕事). 作業療法16巻6号 409-418.
- 小此木啓吾(1990) 喪の仕事とエディプス葛藤. 精神分析研究第34巻第2号104-110.
- 小此木啓吾(1991) 対象喪失と悲哀の仕事. 精神分析研究第34巻第5号294-322.
- Winnicott,D.W.(1965)The Maturational Processes and the Facilitating Environment : Studies in the Theory of Emotional Development. London: Hogarth Press.

鍛治：死別した親との〈かかわり〉

牛島定信訳(1977) 情緒発達の精神分析理論- 自我の芽ばえと母なるもの-, 岩崎学術出版社
やまだようこ(1998) いない母のイメージと人生の物語, 濱口恵俊編『世界のなかの日本型システム』
新曜社281-300.

(心理臨床学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

Relationship with a Dead Mother or Father: Through Images in Drawings

KAJI Madoka

Many studies of bereavement deal with the mourning process. Through this process, the relationship is built between the bereaved and the dead. This paper focuses on what the relationship is. How can we be with the dead when we are left alive and alone? I researched what a relationship with a dead father or mother is by the "Nine-In-One Drawing Method" and interviews with two subjects as cooperators. In these interviews, I asked about their mourning processes and found them to be very individual. I asked them to draw about their dead father or mother. While they were drawing, their relationship with the deceased parent appeared. They could feel warmth, and they felt cared for in the relationship. I believe that such experiences play important roles in the mourning process, enabling them to have an individual relationship with the dead. The relationship was not realistic. But it was true in the intermediate area. Therefore, I am convinced that a relationship with the dead can take form in the intermediate area, and it should be grasped and understood in relation to the mourning process.